医薬品情報における有用な書籍

大津 史子¹ 渡邊 玲子² 奥 田 潤³

名城大学薬学部医薬情報センター

I. はじめに

ソリブジン事件、薬害エイズ……、何度も繰り返される薬害。この背景の1つには、医療従事者の情報というものに対する取り組みや考え方の甘さがあったのではないだろうか。医療における情報、なかでも医薬品に関する情報を医薬品情報という。我々は、医薬品情報とは「医薬品に関わる人間の行動において、その意志決定をするための根拠」と定義している。医師が、薬を選択する時、患者が薬を服用する時、常になんらかの意志決定がなされているはずである。ここに、正確で新しい適正な情報が提供されてこそ、初めて正しい意志決定をすることができる。その情報を供給する重責、これこそ今、社会が薬剤師という職能に求めていることではないのかと考える。

名城大学薬学部医薬情報センターでは、この薬剤師を育成、援助すべく、医薬品情報学教育、薬剤師からの質問への応需、副作用情報の研究等を行っている。その一環として、医薬品情報の情報源で特に有用な資料やメディアを紹介した「医薬品情報の資料370選」という解説資料を作成している。今回は、その中から医薬品情報において特に有用と考えられる書籍をピックアップして紹介

したい。

II. 医薬品情報において特に有用な書籍

医薬品情報において、最も基本となる情報源は、医薬品に添付される製薬メーカー作成の「添付文書」といわれるものである。しかし、添付文書は、基本情報であって、決してすべての情報を網羅したものではなく、常に更新されるが、限界もある資料であることを認識しておかなければならない。そしてそれを補う情報源としての書籍、雑誌、二次資料、オンライン検索やインターネットといったメディアについて熟知しておく必要がある。

ソリブジン事件以来、薬と薬が影響を及ぼし合う「相互作用」という言葉が市民権を得た感がある。そこでまず、具体的な相互作用の例について、どのような書籍にどのような記載があり、どのような特徴があるか、記載内容を比較しながら紹介したい。

1. 相互作用情報に関する書籍

「不整脈に使われるジソピラミド（リスモダン®）と結核の薬リファンピシンの相互作用」を例に挙げる。

まず、基本情報源であるジソピラミドの添付文書をもてみると、残念ながら相互作用の項目自体が存在しない（後述の注参照）。

では、日本の代表的な医薬品集をみてみよう。

¹Fumiko OHTSU: 〒468 名古屋市天白区八事山150.

²Reiko WATANABE. ³Jun OKUDA.

(1996年9月30日 受理)

不整脈治療剤 212
ジソピラミド disopyramide (JP)

の維持療法は、できるだけ速やかに経口投与に切り換える ②禁忌
 ④(内服)高度の房室ブロック、高度の洞房ブロックのある患者。
 (注射)重篤な刺激伝導障害(高度の房室ブロック、高度の洞房ブロック)のある患者 ⑤(内服)うっ血性心不全のある患者。(注射)重
 篤なうっ血性心不全のある患者 ⑥緑内障、尿貯留傾向のある患者
 ⑦慎重投与 ⑧(内服)基礎心疾患(心筋梗塞、弁膜症、心筋症等)の
 ある患者。(注射)高度の心拡大のある患者 ⑨(内服)刺激伝導障害
 (房室ブロック、洞房ブロック、脚ブロック等)のある患者。(注射)
 刺激伝導障害(房室ブロック、洞房ブロック)のある患者 ⑩心房粗
 動のある患者(房室内伝導を促進することがある) ⑪重篤な肝障害
 のある患者 ⑫重篤な腎障害のある患者 ⑬(内服)治療中の糖尿病
 患者 ⑭(内服)重症筋無力症の患者 ⑮(内服)血清カリウム低下
 のある患者 ⑯(内服)高齢者 ⑰(注射)うっ血性心不全の患者 ⑱
 (注射)心筋症、心筋炎の患者 ⑲副作用 ⑳循環器:(普通剤)とき

に心室頻拍(Torsades de pointesを含む)、房室ブロック、その他
 の徐脈が、また、まれに心房細動、心房粗動、心室細動、心室粗動、
 失神、QTの延長等が現れることがあるので、定期的に心電図検査
 を行い、異常が認められた場合には、中止するなど適切な処置を行
 う。また、まれに胸部圧迫感、胸部不快感、胸痛、心胸部増大、心
 不全増強、血圧下降等が現れることがある。(徐放剤)ときに徐脈、
 また、まれに心室頻拍(Torsades de pointesを含む)、心房粗動、
 房室ブロック、洞停止、QT延長等が現れることがあるので定期的
 に心電図検査を行い、異常が認められた場合には、中止するなど適
 切な処置を行う。また、まれに動悸等が現れることがある。(注射)
 ときに心室細動、心室粗動、心室頻拍(Torsades de pointesを含
 む)、心室性期外収縮、ブロックを伴う発作性心房性頻拍、房室ブ
 ロック、心房停止、洞停止、心停止、PQ延長、QRS延長、血圧低
 下が現れることがあるので、観察を十分に行い、このような症状が
 現れた場合には直ちに中止し、適切な処置を行う ⑩ショック(注
 射):まれにショックを起こすことがあるので、観察を十分に行い、
 異常が認められた場合には中止し、適切な処置を行う ⑪低血糖
 (内服):まれに低血糖が現れることがあるので、低血糖症状が現れ
 た場合には中止するなど適切な処置を行う ⑫血液(普通剤):まれ

図1. 医療薬日本医薬品集(一部抜粋)

図1は日本の添付文書集ともいふべき「医療薬日
 本医薬品集 1995 日本医薬情報センター、薬業
 時報社」のジソピラミドの使用上の注意部分の抜
 粋である。医療薬日本医薬品集は、厚生省薬務局
 の援助と各メーカーの協力を得て、常時国内で使
 用されている医薬品について、最新の添付文書の
 内容を収録、整理し、他の資料からの情報も加え
 て編集したものである。医薬品の一般名、商品名
 から検索することができるほか、新薬や製薬企業
 住所録等の種々の付録がついている。この10月
 には1996年10月版がCD-ROM版と同時に出版
 される。CD-ROM版は、年4回のデータ更新(有
 料)があり、保険薬事典、識別ハンドブック、長
 期投与医薬品便覧の内容をも含むため、応用範囲
 も広い。今回のバージョンからは、各病院の採用

の有無やメモを記入できる機能が搭載されている。
 では、記載内容に目を向けてみよう。本来なら
 『慎重投与』と『副作用』という項目の間(図1、
 矢印)に相互作用の項目があるのが一般的である
 が、ジソピラミドにはない。この書籍の基本情報
 源は添付文書であるため、当然のことである。

さて、添付文書にも医療薬日本医薬品集にも相
 互作用の記載がない。はたして本当にこの両者の
 薬剤に相互作用は存在しないのであろうか。

図2は、アメリカの添付文書集PDR 96のジソ
 ピラミドの相互作用部分の抜粋である。「PDR:
 Physicians' Desk Reference, Medical Economic
 Company Inc」は、アメリカの主要医薬品の添付
 文書集で、一般名と商品名索引、メーカー別商品
 名索引、薬効別索引を持っている。本文はメーカ
 別に製品の解説がされており、カラーの商品実物
 大写真も収載されている。別冊として相互作用と
 副作用からの索引と適応疾患別索引がある。さて、
 相互作用の記載はどうであろうか。リファンピシ
 ンの名前こそあがっていないが、肝臓の酵素を誘
 導する薬剤には注意が必要であり、血中濃度モニ
 タリングが必要である旨が記載されている。「肝
 臓の酵素を誘導する薬剤?」、リファンピシンは

<p>DISOPYRAMIDE 記載部分</p> <p>項目: Drug Interactions 相互作用</p> <p>If phenytoin or other hepatic enzyme inducers are taken concurrently with Norpace or Norpace CR, lower plasma level of disopyramide may occur. Monitoring of disopyramide plasma levels is recommended in such concurrent use to avoid ineffective therapy.</p> <p>訳: もし、フェニトインや肝臓の酵素を誘導するような薬物を併用する場合は「ジソピラミド」の血中濃度が低くなる可能性がある。併用しなければなら ない場合は、血中濃度モニタリングをすること。</p> <p>注: Norpace:ジソピラミドのアメリカ商品名</p>

図2. PDR(一部抜粋)

<p>Vol.1 DISOPYRAMIDE 記載部分（相互作用）</p> <p>項目：Precautions to Consider 使用上の注意</p> <ul style="list-style-type: none"> Drug Interactions and/or related problems 相互作用 Hepatic enzyme inducers(See Appendix 2) 肝臓酵素誘導剤（付録2参照） <p>(concurrent use may reduce serum disopyramide to ineffective concentrations; therefore monitoring of its serum concentrations is necessary during concurrent therapy)</p> <p>訳：併用によってジソピラミドの血中濃度が低下する可能性があるため併用する場合は、血中濃度モニタリングが必要である。</p> <p>付録：Appendix 2</p> <p>SELECTED LIST OF DRUG-INDUCED EFFECTS</p> <p>Hepatic enzyme inducers</p> <p>Alcohol(with chronic use),Barbiturates, Carbamazepine, Carisoprodol, Glutethimide, Griseofulvin, Nitrous oxide, Papaverine, Phenylbutazone, Phenytoin(and possibly other hydantoin),Primidone,Rifampin,Tolbutamide</p>	<p>Vol.2 DISOPYRAMIDE 記載部分（副作用）</p> <p>項目：Precautions While Using This Medicine 使用上の注意</p> <ul style="list-style-type: none"> Avoid alcoholic beverages until you have discussed their use with your doctor. Alcohol may make the low blood sugar effect worse and/or increase the possibility of dizziness or fainting. <p>訳：アルコール飲料の飲用は医師と相談してください。アルコールは低血糖を引き起こしたり、めまいや失神を起こすことがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> Disopyramide may cause hypoglycemia (low blood sugar) in some people. Patients with congestive heart disease or diabetes especially should be aware of the signs of hypoglycemia. If these signs appear, eat or drink a food containing sugar and call your doctor right away. <p>訳：ジソピラミドは、低血糖を起こすことがあります。心臓病や糖尿病の患者は、低血糖の症状を覚えておいて下さい。もしそのような徴候があれば、砂糖の入った飲物や食べ物をとり、医師にすぐに連絡してください。</p> <p>項目：Side Effects of This Medicine 副作用</p> <p>Check with your doctor as soon as possible if any of the following side effects occur:</p> <ul style="list-style-type: none"> Signs and symptoms of hypoglycemia(low blood sugar) Anxious feeling,Chills,Cold sweats, Confusion, Cool pale skin, Drowsiness, Fast heartbeat,Headache, Hunger (excessive), Nausea,Nervousness,Shakiness, Unsteady walk, Unusual tiredness or weakness <p>訳：次のような副作用が起こったら、すぐに医師の診察を受けてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 低血糖の徴候や症状・・・
---	---

図3. USP-DI 96（一部抜粋）

関係しないのだろうか。

図3は、USP-DI 96の一部抜粋である。「USP-DI: USP Dispensing Information, USP Convention Inc」は、アメリカ薬局方(USP: United States Pharmacopoeia)に収載されている医薬品の臨床応用についての解説書で、Vol.1: Drug Information for the Health Care Professional, Vol.2: Advice for the Patient, Vol.3: Approved Drug Products and Legal Requirementsの3分冊となっている。

Vol.1は医師、薬剤師等、プロ向けの医薬品情報集で、各医薬品もしくは薬効ごとにその薬剤の物性や体内動態値、薬理作用、効能・効果、注意事項、副作用、患者への助言事項、投与量などが解説されている。

Vol.2は患者への服薬指導解説書ともいうべきもので、薬の使い方、注意事項などを簡単な表現で一般の人にもわかりやすく解説してある。

Vol.3は処方薬のリスト等である。この書籍の編集には、医療従事者の各団体のみならず、患者の代表としての消費者団体が参加しており、国民のコンセンサスを得た情報源として世界的に評価が高い。

さて、相互作用部分の記載であるが、図3左が、

Vol.1の相互作用部分の抜粋である。肝臓酵素誘導剤に注意すべき点の記載と、付録として、肝臓酵素誘導剤のリストが添付されており、リファンピシン(アメリカ名 Rifampin)の名前がはっきりと(矢印)記載されている。

図3右は、Vol.2つまり患者への服薬指導解説書の副作用（低血糖）の記載部分である。このVol.2の大きな特徴は、この副作用部分の記載方法である。ジソピラミドはまれに低血糖という副作用を引き起こすことがあるが、患者への情報提供を考えた場合、「低血糖が起こるかもしれません。」では、患者はなんの意志決定もすることができない。自分自身の身に起こっていることが低血糖症状なのかどうか、その判断ができる情報でなければ意味がない。Vol.2では、低血糖の諸症状を患者が感知し、理解できると思われる表現で記載して、その対処方法（すぐに砂糖の入った食べ物をとるなどの対処）も記載されている。

図4は、相互作用専門の書籍の抜粋である。左には、日本の相互作用専門の書籍として、「医薬品相互作用ハンドブック、厚生省薬務局企画課監、薬業時報社、1992」を挙げた。薬物療法上重要な相互作用242の組み合わせについての作用、処置等の解説のほか、臨床医からのコメントおよ

医薬品相互作用ハンドブック

ジソピラミド ↔ リファンピシン			
作用	機序		
<ul style="list-style-type: none"> リファンピシンがジソピラミドの作用を減弱させることがある リファンピシンがジソピラミドの抗コリン作用を増強し、ロ内乾燥、排尿障害、腹視等の副作用が見られることがある 	<ul style="list-style-type: none"> リファンピシンがジソピラミドの肝での代謝を促進し、血中濃度を低下させる 同様にジソピラミドの代謝が促進されて代謝産物であるモノ-N-デアルキルジソピラミドの血中濃度が上昇する。この代謝産物の生理活性はジソピラミドより弱いが、抗コリン作用はジソピラミドより強いいため作用以上にこの抗コリン作用が増強される 		
処置			
<p>① 併用時はジソピラミドの抗不整脈作用の減弱に注意し、症状が現われるようであれば、ジソピラミドの血中濃度を測定しながらジソピラミドを増量する必要がある</p> <p>また抗コリン作用の発現にも注意する</p>			
医師のコメント	各種数値		
併用するときに、特に注意を払う組み合わせである	<p>▶ジソピラミド¹⁾</p> <table border="1"> <tr> <td>有効血中濃度</td><td>(臨床)最低 1 µg/ml 付近</td></tr> </table>	有効血中濃度	(臨床)最低 1 µg/ml 付近
有効血中濃度	(臨床)最低 1 µg/ml 付近		
文献書誌事項	評価 4-2-3		
<p>¹⁾ 日本薬局方医薬品情報、薬業時報社、1991。</p>			

Drug Interactions Facts

302

Disopyramide

Disopyramide* (eg, Norpace)

Rifampin

Rifampin* (Rifadin, Rimactene)

Significance

2

Onset

☐ Rapid
☒ Delayed

Severity

☐ Major
☒ Moderate
☐ Minor

Documentation

☐ Established
☐ Probable
☒ Suspected
☐ Possible
☐ Unlikely

Effects

RIFAMPIN may decrease the serum levels of DISOPYRAMIDE. However, since the levels of an active metabolite may increase, it is difficult to predict if a decreased therapeutic response would occur.

Mechanism

Hepatic metabolism of DISOPYRAMIDE is increased.

Management

Monitor disopyramide concentrations and the patient's electrocardiogram during concurrent RIFAMPIN therapy. An increased DISOPYRAMIDE dose may be necessary.

Discussion

Eleven patients with tuberculosis were given a single dose of disopyramide 200 to 300 mg before and after 2 weeks of rifampin therapy plus one or two other agents (isoniazid, pyrazinamide or ethambutol).¹ Compared to disopyramide alone, rifampin decreased disopyramide's elimination half-life by 44.5%, its area under the plasma concentration-time curve (AUC) by 59.5% and its renal clearance by 26%. The AUC of mono-N-dealkyldisopyramide (MND, an active metabolite of disopyramide) was increased by 91.8%, while the renal clearance of MND was not significantly increased. The amount of unchanged disopyramide excreted in urine in 24 hours decreased 76.5%, while that of MND increased by 58.5%. The ratio of MND/disopyramide in 24 hour urine increased 6.9 fold. These parameters indicate the increased metabolism of disopyramide by rifampin. However, since MND has some antiarrhythmic activity, it is not known if the interaction would result in reduced therapeutic efficacy of disopyramide. Administration of disopyramide to a 62-year-old patient receiving rifampin 600 mg daily resulted in subtherapeutic disopyramide levels and failure to correct the arrhythmia in spite of escalating doses of disopyramide up to 900 mg daily. Within 5 days of discontinuing rifampin, disopyramide serum levels increased and the arrhythmia was abolished.²

¹ Altio ML, et al. Br J Clin Pharmacol 1981;11:279.

² Staum JM, DICP, Ann Pharmacother 1990;24:701.

* Asterisk indicates drugs cited in interaction reports.

図4. 相互作用専門書籍 (一部抜粋)

び各主要文献における評価をコンパクトにまとめた実用書である。相互作用の臨床的意義と対応、相互作用発症のメカニズムにも言及されている。この本は、アメリカの相互作用の有用な3冊の書籍を元に書かれたものであるが、その元本の1つが図4右の「Drug Interactions Facts, David S., Facts & Comparisons, ルーズリーフ差し替え式」である。臨床的評価、対応、機序が詳しく文献も豊富で、その相互作用の重要度が5段階の数字(重用なものほど数字は小さい)で表現されておりわかりやすい。差し替え式なので常に新しい情報を得ることができる。これらの情報をみるとジソピラミドとリファンピシンの相互作用は明確であり、併用によってジソピラミドの代謝が進み、ジソピラミドの効果減弱が予測されることははっきりしているようである。最近の研究でリファン

ピシンは肝臓の薬物代謝酵素をもっとも誘導しやすい薬として、併用に十分注意しなければならない医薬品であることが知られている。

注：今年(1996)6月にジソピラミドの使用上の注意がようやく改訂された。したがって、最新の添付文書には相互作用欄が追加され、リファンピシンとの相互作用についても記載されている。しかし、PDRに図2のような情報が記載されたのは、なんと1982年。USP-DIに図3のような情報が記載されたのは、1984年である。

その他の相互作用情報での有用な書籍としては、以下のようなものがある。

医薬品が網羅的に紹介されている資料としては、「医薬品相互作用、仲川義人、医薬ジャーナル社、1994」がある。これは添付文書中の相互作用についての記載ばかりでなく、相互作用の発現機序や

症例報告の文献情報の要旨を一覧表で記載している。アメリカのものでは、前述の Drug Interaction Facts に勝るとも劣らない資料「Drug Interactions & Updates, Hansten P.D., Horn J.R., Lea & Febiger, Applied Therapeutics, ルーズリーフ差し替え式」がある。相互作用の機序、処置、その臨床的意義はもちろん記載されており、文献も豊富である。相互作用の評価は、3段階で表現されている。

相互作用の最新の研究成果をまとめたものとしては、雑誌月刊薬事の増刊号で「薬物間相互作用と医薬品の適正使用, 伊賀立二監修, 薬業時報社, 1996」がある。また、具体的な相互作用の対処について解説した「臨床医のための薬の相互作用とそのマネジメント—なぜ起こる, どう防ぐ—, 伊賀立二監修, 南山堂, 1996」も新しい書籍である。

薬と薬の相互作用ばかりでなく、飲み物、食べ物との相互作用も重要である。この種の書籍としては、「飲食物・嗜好品と医薬品の相互作用 改訂2版, 薬業時報社, 1993」がある。厚生省治療共同研究班が行った文献調査を基に、430件のデータを薬効・食品・嗜好品別にまとめたもので、飲食物・嗜好品, 医薬品名から検索できる。

薬の検査値への影響も相互作用である。この種の書籍として新しいものでは、「臨床検査値と薬剤, 村井哲夫他, 南山堂, 1996」がある。アメリカのものでは、少し古くなったが、「Effects of Drugs on Clinical Laboratory Tests 3rd ed., Young D.S., AACC Press, 1990」があり、薬が検査値に与える影響について内因的および外因的(分析法)にわけて文献を紹介している。

2. 副作用情報に関する書籍

相互作用情報と並んで重要な位置を占めるのが副作用情報である。副作用情報の情報源としては、相互作用で解説した医薬品集がまず挙げられる。ここでは、副作用の専門書籍を紹介したい。

副作用情報においては、厚生省から隔月に出される「医薬品副作用情報」が基本情報といえるが、この内容の解説書が出版されている。「Annual Report 医薬品の副作用 1990-1994, 伊藤宗元他編, 中外医学社」である。中央薬事審議会副作用調査会と厚生省薬務局安全課の協力で副作用調査会のメンバーが執筆している。総論、副作用と薬の使い方、新医薬品等の副作用のまとめや発現頻度、医薬品副作用モニター報告の概要などが記載され、索引は医薬品名の和名、英名、副作用名から検索できる。副作用と薬の使い方では、その年の医薬品副作用情報に掲載された副作用について、症例の紹介から臨床症状、副作用の発現機序、使用上の注意点と安全対策、文献等が詳しく解説されている。しかし、1995年以降発行されておらず、今後も発行される予定がないとのことで残念である。

ここ数年、医学書全般に症例や症状からの視点で書かれた書籍が多くなってきている。副作用においても副作用症状から医薬品をみるという視点で書かれたものが新鮮で非常に有用である。その老舗というべき書籍が、「症状からみた薬の副作用, 名尾良憲, 中外医学社, 1986」である。薬の副作用を副作用症状からみて解説しており、目次は副作用の症状別になっている。索引は薬品名と副作用名から検索できる。各副作用症状についての総論的な解説のあと、各副作用についての日本および海外の論文を、写真や薬歴、図、表をふんだんに使いながら紹介している。最近の書籍では、「薬の副作用チェックマニュアル, 高橋隆一編集, 中外医学社, 1994」がある。索引はあまり充実していないが、副作用の総説と症例が一体となった書籍である。また、「この薬のこの副作用, 松田重三編集, 医歯薬出版, 1996」は、現在多用されている薬の覚えておくべき副作用をまとめたもので、薬剤の一般名や商品名、副作用の症状から検索できる。原因薬の説明、副作用とその出現機序、

表 1. 医薬品情報における特に有用な資料

著者	図書	著者	出版社	題名	価格	内容
医薬品集	JAPAN DRUGS '96 日本医薬品総覧	JAPAN DRUGS編集委員会	メディカルレビュー社	1996	25000	「使用上の注意」「服薬指導のポイント」に重点をおいた医薬品集。適応・使用について記載され、参考文献まで記載されているところが嬉しい。MEMO欄には各薬剤の新しい情報が記載されている。
国内	医療薬 日本医薬品集 1995	日本医薬情報センター	薬業時報社	1995	21000	本文参照。1996年版は10月発行。
国内	OTCハンドブック[2]1995-1996	堀 美智子 監修	学術情報流通センター	1995	9000	OTC253製品を23の薬効にわけ、薬効毎に使用目的と適応、使用上の注意事項とその解説、薬理作用の解説とその特徴、販売時の注意事項、商品一覽表からなる。商品一覽表は縦が商品名、横が成分名からなる一覽表で情報を得やすい。薬歴管理に役立つ相互作用一覽、慢性疾患患者販売注意成分一覽付。
医薬品集	AMA Drug Evaluations Drug Evaluations		American Medical Association	1995	20000	米国医師会の薬事審議会 Council on Drugs によって評価された医薬品が収録されており、医薬品の臨床での使用方法に関する情報が記載されている。構造式、作用、用法・用量、吸収、使用上の注意、相互作用、副作用等。一般名、商品名、適応症、副作用症状から検索できる。
海外	MARTINDALE The Extra Pharmacopoeia 31th	Kathleen Parfitt	The Pharmaceutical Press	1996	43000	約110年の歴史を誇る名著。医師・薬剤師を対象として、医薬品の吸収、代謝、排泄、毒性、副作用物理・化学性質、新医薬品に関する最新情報を、参考文献をあげ、詳細にわかりやすく解説している。収載医薬品は非常に広範囲に渡っており、収録国数は日本をはじめ14カ国である。ヨーロッパの薬物が多く掲載されている。索引は、一般名、治験番号、化学名、公定名、薬効分類名から検索できる General Index と商品名索引とがある。
	PHYSICIANS' DESK REFERENCE '96		Medical Economics Company Inc.	1996	11000	本文参照。
	USP DI '96 ,I,II,III		USP Conventions Inc.	1996	56600	本文参照。
治験薬	明日の新薬		テクノミックス クインフォ メイション サービス ミクス	1996	250000	前臨床のものを含む国内と海外の治験薬を網羅。薬物の生い立ち、基礎・臨床試験結果から、開発の状況、承認時期見込、売り上げ高予想、引用文献等が記載されている。一般名、商品名、治験番号、(略記号)、薬効名、会社名から検索できる。毎月のアップデートがある。高価。
	TRIAL DRUGS 最新治験薬 95-'96		ミクス	1996	25000	国内の学術雑誌等を情報源として、Phase I 以降の治験薬の概要をまとめたもの。文献のデータが抜粋されていて使いやすい。
薬理学	Goodman & Gilman's the Pharmacological Basis of Therapeutics, 9th Ed.		McGraw-Hill Companies	1996	11000	英語版は第9版。日本語版は第8版(1992, ¥40,170)。本書が上梓されて50年余になるが薬理学の最も優れた図書としての評価は高い。本書には三つの原則が貫かれている。すなわち薬理学と各医学と領域との関連、医学の顕著な進歩に伴う各種医薬品の作用とその応用の現時点での評価、及び治療学における薬力学(Pharmacodynamics)の応用の重要性を強調するという3項目であって、その後薬物の評価と考え方を重視し、4大項目としている。付録には、患者のコンプライアンスを得る指導の原則や投与計画の設計と適性化(カイネティクス・データー)、薬物相互作用等がある。
	薬理学アトラス	福原武彦 監訳	文光堂	1992	6180	Taschenatlas der Pharmakologie の訳本。右のページのカラー・アトラスを中心とし、その解説が左ページ・アトラスが非常にわかりやすい。

特 殊 病 態 時 等 の 薬	Drug Therapy 1. 胃障 害患者への投薬	清水直容 総監	ミクス	1988	2472	胃障害患者における各薬効別薬の選び方が解説されている.Q&Aや禁忌、慎重投与の一覧もついている。
病 態 時 等 の 薬	Drug Therapy 2. 肝障 害患者への投薬	清水直容 総監	ミクス	1989	2500	肝障害患者における各薬効別薬の選び方が解説されている.Q&Aや禁忌、慎重投与の一覧もついている。
病 態 時 等 の 薬	Drug Therapy 3. 血液 障害のある患者への投 薬	清水直容 総監	ミクス	1992	2500	血液障害患者における各薬効別薬の選び方が解説されている.Q&Aや禁忌、慎重投与の一覧もついている。
薬 物 法 関 連 者 へ の 投 薬	Drug Therapy 5. 皮膚 ・結合組織疾患のある患 者への投薬	清水直容 総監	ミクス	1992	2500	皮膚結合組織障害患者における各薬効別薬の選び方が解説されている.Q&Aや禁忌、慎重投与の一覧もついている。
薬 物 法 関 連 者 へ の 投 薬	Drug Therapy 6. 糖尿 病 その素因のある患 者への投薬	清水直容 総監	ミクス	1988	2060	糖尿病患者での各薬効別薬の選択の仕方が解説されている.血糖、尿糖、薬効等に影響する可能性のある薬剤一覧も収載。
薬 物 法 関 連 者 へ の 投 薬	Drug Therapy 9. 高齢 者への投薬	清水直容 総監	ミクス	1990	2500	高齢者における各薬効別薬の選択の仕方が解説されている。高齢者に対して慎重投与などの記載のある薬剤一覧も収載。
小 児 関 連 者 へ の 投 薬	小児薬用量情報	中野貢汎 監修	医薬ジャーナル社	1994	5356	小児への薬用量を一覧表でまとめて記載されておりやすい.参考文献の記載もあり小児薬用量を調べるには便利。
小 児 関 連 者 へ の 投 薬	小児の薬理学	藤田 昂, 菅原和信	南山堂	1992	5665	小児の体内動態や薬理作用の特性等の総論と各疾患での薬剤の選び方使い 方について文献をもとに詳細に解説してある。
妊 婦 関 連 者 へ の 投 薬	実践 妊娠と薬1,173例 の相談事例とその情報 道 編集	佐藤孝道, 加野弘 道 編集	薬業時報社	1992	6500	虎ノ門病院の妊娠と薬相談外来での経験と実践をもとにして、胎児への薬 剤の影響についてまとめたもの.薬剤の危険度評価,各種文献や相談事例, 服用後の対応,患者への対応等具体的な対策が記載されている。
授 乳 婦 関 連 者 へ の 投 薬	妊娠期授乳期 医薬品 の安全度判読事典 妊婦中の投薬とそのリ スク	小澤 光, 丹野慶紀 監訳 雨森良彦 監修	西村書店 医薬品治療 研究会	1992 1990	15450 721	Drugs in Pregnancy and Lactation 2ndの訳.安全度評価と胎児への影響, 授乳児への影響が豊富な文献をもとに記載されている。
授 乳 婦 関 連 者 へ の 投 薬	薬剤の母乳中への移行 改訂第2版	菅原和信, 豊口慎 子	南山堂	1991	8240	会)が作成した.リスク評価を5段階で記載してある。 オーストラリア政府機関(オーストラリア医薬品評価委員会先天的異常部 会)が作成した.リスク評価を5段階で記載してある。
授 乳 婦 関 連 者 へ の 投 薬	Annual Report 医薬品 の副作用 1990-1994 がん化学療法の副作用 対策	伊藤宗元 他 編集 吉田清一 監修	中外医学社 先端医学社	**** 1992	**** 9000	添付文書,PDR,AMA-DE,Martindaleを参考に,何らかの形で母乳への移行に 触れている医薬品について,情報を集めまとめたもの.農薬,重金属,化学薬 品,医薬部外品についても解説している.図や表を豊富に使っている。 本文参照。
授 乳 婦 関 連 者 へ の 投 薬	国内 の薬のこの副作用 マニキュアル	高橋隆一 編集 松田重三 編集	中外医学社 医歯薬出版	1994 1986	6798 6180	現在多用されている薬の覚えておくべき副作用をまとめたもの.目次は原 因薬の五十音順.各項目の下には主な商品名も記載されている.索引は,薬 剤の一般名や商品名から及び副作用の症状から検索できる.原因薬の説明, 副作用とその出現機序,その対策,似た作用を有するその他の薬物,その他 の注意すべき副作用が記載。 本文参照。
授 乳 婦 関 連 者 へ の 投 薬	症状からみた薬の副作 用	名尾良憲	中外医学社	1986	8600	本文参照。
授 乳 婦 関 連 者 へ の 投 薬	新・薬剤副作用軽減化 の工夫	垂井清一郎, 高杉 益充	医薬ジャーナル社	1995	4944	副作用をいかに少なくするかの観点を重視し,各薬剤毎に副作用を軽減化 するための種々の方法,他薬剤との併用や,投与期間,投与量,投与法の工 夫などについて解説している。

題名	図書	著者	出版社	発行	価格	内容
副題 海外	MEYLER'S SIDE EFFECTS OF DRUGS 12Ed	M. N. G. Dukes	ELSEVIER	1992	48500	本文参照。
相作用	医薬品相互作用	仲川義人	医薬ジャーナル社	1994	10300	本文参照。
国内	医薬品相互作用ハンドブック	厚生省薬務局企画課 監	薬業時報社	1992	2800	本文参照。
	飲食物・嗜好品と医薬品の相互作用 改訂2版		薬業時報社	1993	3500	本文参照。
	臨床検査値と薬剤	村井哲夫	南山堂	1996	3298	本文参照。
	この薬の多剤併用副作用	松田重三 編集	医歯薬出版	1994	5200	現在多用されている薬の覚えておくべき相互作用をまとめたもの。「この薬のこの副作用」の相互作用版。まとめ方がポイントの押さえている。
	薬物間相互作用と医薬品の適正使用	伊賀立二 監修	薬業時報社	1996	3900	本文参照。
	薬の相互作用とそのマネジメント	伊賀立二、澤田康文	南山堂	1996	3708	本文参照。
	薬と検査成績	林康之 編集	中外医学社	1988	7000	薬の検査への影響を直接妨害の有無に的を絞って記載してある。症例や文献が豊富。
相互作用	Drug Interactions & Updates	Hansten P.D., Horton J.R., Lea & Ferguson	Applied Therapeutics	1991	17000	本文参照。
海外	Drug Interactions Facts	Mangini R.J.	J. B. Lippincott Company	1991	9800	本文参照。
	Effects of Drugs on Clinical Laboratory Tests 3ed.	Young D.S.	AACC PRESS	1990	20000	本文参照。
中毒	急性中毒情報ファイル 第3版	大垣市民病院薬剤部	広川書店	1996	18540	原則として1項目1ページに品名、成分、中毒量、作用機序、構造型、中毒症状、処置法等がカード形式にまとめられて記載されている。農薬38項目、家庭用品60項目、工業用品等70項目、医薬品128項目、他に一般薬、公衆衛生用薬の一覧表がある。中毒原因物質の一般名、商品名から検索できる。
	改訂 急性中毒処置の手引 必須220種の化学製品と自然毒情報	鶴岡 卓 監修	薬業時報社	1994	6700	日本中毒情報センターでの経験をもとに医師、薬剤師が一般市民から中毒の問い合わせを受け、時に直ぐ役立つようにに中毒発生病度の高い家庭用品を中心に解説してある。毒性、症状、処置、問い合わせ時の確認ポイント、情報提供時の要点、体内動態、薬理作用、治療上の注意点、文献、商品名が記載。

中毒	産業中毒便覧 増補版	後藤 綱, 池田正之, 原 一郎	医歯薬出版	1986	48000	広範囲の化学物質について, 環境・健康管理に必要なことがらを解説している. その内容は, 用途, 物理・化学的性質, 致死・中毒量, 代謝, 症状, 許容濃度, 催腫瘍性等が簡潔に解説されている.
	症例で学ぶ中毒事故とその対策	日本中毒情報センター	薬業時報社	1995	5200	実際に経験した症例をもとに記載されている. まず, 症例が呈示され, 次に概要, 成分・組成, 毒性, 体内動態, 症状, 検査, 治療, 参考文献が記載されている.
配合	注射薬配合変化早見	下川正見 監修	薬事新報社	1995	4300	注射剤の配合変化について各薬剤毎に記載.
服薬指導	医師・歯科医師・薬剤師のための医薬品服薬指導情報集 1-5	厚生省薬務局 監修	薬業時報社	****	****	第1集-第5集までで約100の医薬品について記載されている. 名前, 効能効果, 概要, 服用方法, 飲み忘れの処置, 多量服用時, 保存, 相互作用, 副作用等について記載されている.
	薬剤指導情報集 1-5	五島雄一郎 監修	南山堂	1995	10300	解説編とイラスト編の2冊からなる. 解説編では病気の説明, 原因, 増悪因子, 症状, 合併症, 検査所見, 診断, 日常生活指導, 治療などの項目を見出しをつけて記載しているため読みやすい. イラスト編ではその中の一部をイラストつきで記載.
	疾病別服薬指導マニュアル	市村 藤雄 監修	薬業時報社	1994	3600	病気の解説の後, 薬についての詳細な解説がなされている. 服薬指導をする上での知識の基本となる書籍.
	薬効別 服薬指導マニュアル 第3版	田中良子 監修	薬業時報社	1996	6400	各薬効ごとに指導のポイントを患者向け, 薬剤師向けに記載し, 副作用とその他の対策, 服用を忘れたいときの指示等について解説している.
	わかりやすい薬の知識 - 知って安心, 薬の正しい使い方 -	二宮英 編集	新日本法規出版	1995	3600	一般の人向けに医薬品の基本的な情報と, 主な疾患に対して使われる薬剤の注意事項がイラストで書かれている.
消毒	消毒剤の選び方と使用上の留意点	神谷 晃, 尾家重治	薬業時報社	1992	3400	アメリカ, イギリスの文献を多数引用してながら様々な場面における消毒の実際について図・表・イラストを交えて詳しく解説している. チェックポイントを設定している.
感染	院内感染防御マニュアル	竹田美文, 古泉秀夫	薬業時報社	1996	3200	細菌やウイルスの性状や感染経路の解説や予防策について詳細に解説されている.
行政	医薬品副作用情報		厚生省薬務局発行	****	0	副作用モニター報告のうち, 特に注目すべきと思われる症例及び企業から報告された副作用症例報告を集め, その概要を隔月に発行しているもの.
府刊	新医薬品承認審査概要 (SBA) No. 1-7	厚生省薬務局新医薬品科 編集	日本公定書協会	****	****	新医薬品の内, 特に重大な作用があるものや重篤な副作用が知られている薬剤について, 新薬承認時の情報を公開した資料.
他物	薬事ハンドブック '96		薬業時報社	1996	2300	日本の薬事事情を知るにはもってこいの本.
* 注意						注意事項: 書籍は, 五十音順もしくはアルファベット順に配列した. シリーズや年刊の書籍は数冊分をまとめて記載したため, 価格及び出版年の欄は****と表示した. また, 洋書の価格については時価の要素を含めた概算とした.

対策、似た作用を有するその他の薬物、その他の注意すべき副作用が解説されている。海外のもので評価の高い資料が「Meyler's Side Effects of Drugs, Dukes M.N.G., Elsevier, 1992」である。オランダ薬物評価委員会副会長 M.N.G. デュークスの編集になる医薬品の有害作用および相互作用に関連する研究報告を総括した専門書である。これはだいたい5年ごとに発行され、その間は、「Side Effects of Drugs Annual」として毎年発行されている。この領域での最近の進歩を多数の文献を添えて厳密に検討したものが収載されている。

3. その他の領域の書籍

表1に各領域の書籍のうち、特に有用なものを挙げた。

疾患や治療に関する書籍および臨床検査に関する書籍等は医学図書館においては充実していると考え、割愛した。また、個々の医薬品の専門書籍についても割愛している。

Ⅲ. 終わりに

医薬品情報において特に有用な書籍を紹介した。

1997年4月1日から、薬剤師法の改正が行わ

れる。この改正により、薬剤師が医薬品を調剤するときは、薬の適正な使用のための「情報」を一緒に患者に提供することが義務化された。薬剤師がチーム医療の一員として、その職能を発揮することが社会的な要請となってきたのである。このような社会情勢の中で、医薬品情報の重要性はますます高まってくると考えられる。今までは、医学図書館を薬剤師が利用する機会は少なかったのが現実ではないだろうか。しかし、今までのように薬局にある添付文書だけを医薬品情報源としては、チーム医療の一員としてその職能を発揮することはできない。医学図書館は臨床情報の宝庫である。しかし、医薬品情報に関する資料はニーズが少なかったかもしれない。今後は薬剤師が医学図書館を利用する機会も多くなってくると思われる。ぜひ、この分野の資料の充実もお願いしたい。

メディアの進歩やインターネットの急速な普及によって、書籍や雑誌、二次資料の出版形態も変化しつつある。今後は、これらの動向も見据えながら、新しい医薬品情報の展開を模索していきたいと考えている。